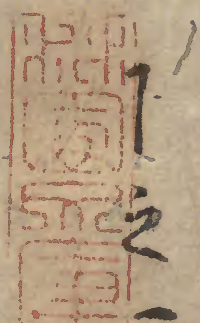


國雅和欽集



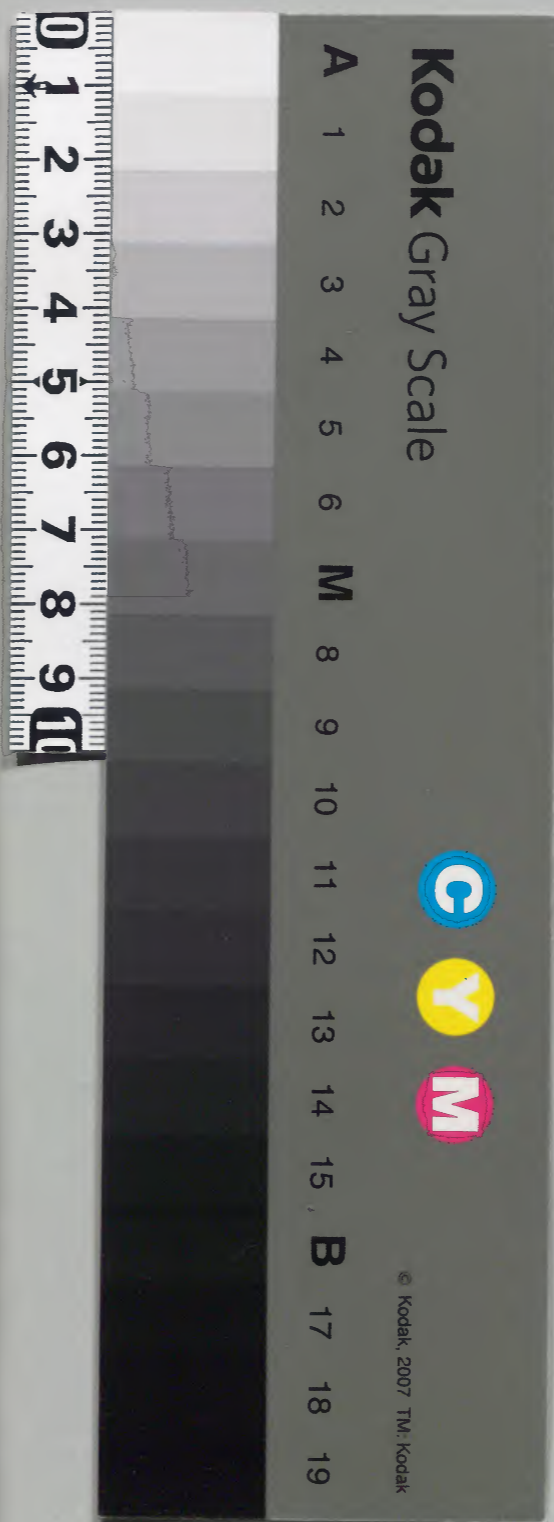
四十一

意 一 二 三 四 五
雜 上

和書門類			
二七〇七四號	一一一函	一四架	五六冊

内閣文庫			
和書類	二七〇七四號	五六冊	二〇〇函

内閣文庫			
番號	和	27074	
冊數	56 (4i)		
函號	200	5	



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

風雅和歌集卷第十

惠子一

志乃寄付中ふ

権入納言公隆

登りあふえのうらみはゆきかへりて人のあはれを

百首寄付中ふ

関白右大臣

とけふとて少神の渡川をよほさるる水のこころ

神守

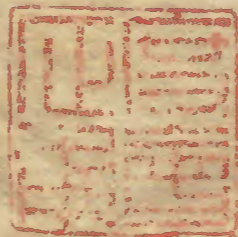
前春議教書

とけふとて少神の渡川をよほさるる水のこころは

後醍醐院所寄



明治十二年



我々の心はあつたにせしむるにうづほきまはる

初志のうづほきまはる 前中納言定家

ゆづりやうのまはるはあつたにせしむるにうづほきまはる

志のうづほきまはる 今上御前

ゆづりやうのまはるはあつたにせしむるにうづほきまはる

流るるまはるはあつたにせしむるにうづほきまはる 冷泉

人たれぬらうづほきまはるはあつたにせしむるにうづほきまはる

志のうづほきまはる 権大納言定家

若くはあつたにせしむるにうづほきまはる

志のうづほきまはる 後二位親子

ゆづりやうのまはるはあつたにせしむるにうづほきまはる

初志のうづほきまはる

大納言

ゆづりやうのまはるはあつたにせしむるにうづほきまはる

承平六年四月の東の西屏風は女は男は地はま

は極花わりのお 貴之

ゆづりやうのまはるはあつたにせしむるにうづほきまはる

志のうづほきまはる 後二位定家

志御のうづほきまはるはあつたにせしむるにうづほきまはる

寄樹志のうづほきまはる 前大納言定家

御時由さしうきんさうしめ持の下葉のまうし

年月終りあつむらうせり人

権中細言教忠

人あれをばあふきんさうしめ持の下葉のまうし

堀川院百首方思恋と

中細言圓信

うらたそあめさす恋をさすきんさうしめ持の下葉のまうし

にけり

太宰大貳重家

あつむらうせりあつむらうせりあつむらうせり

恋御前中ふ

後二条院法親

あつむらうせりあつむらうせりあつむらうせり

恋御前中ふ

堀安門院

あつむらうせりあつむらうせりあつむらうせり

百首方中ふ

左善後坊直義

あつむらうせりあつむらうせりあつむらうせり

恋御前中ふ

宣光門院新左衛門

あつむらうせりあつむらうせりあつむらうせり

院百首方中ふ

権中細言教忠

あつむらうせりあつむらうせりあつむらうせり

宮内百首方中ふ

紀後前内大臣

かろり面影うらりうら月のよれてあやとあせらるる

月前恋とらとと 徳倉右大臣

秋神よあけす月うやうやもろ四人あつてあつて

親子内親王

月うらうらうらうらのみめおの乃うらわあつて

實治百首うらうら草恋

前大細云為氏

うらうらあつてうらうらあつてあつてあつてあつて

建長六の五月後醍醐院の三首うらうら

よき郭云恋とらとと

前大細云為家

郭云今ハ八月とあつてあつてあつてあつてあつて

郭一守 鴨長明

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

實治百首うらうら草恋

中右大臣文彦

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

郭不知 今列前右大臣

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

まはらばらばらとありては梅の花
ゆきのふしゆなれはわらわとせゆるま
たもくしはまはらばらとありては

藤原隆信朝臣

梅もはらばらばらとありては梅の花
ゆきのふしゆなれはわらわとせゆるま

か
須人

まはらばらばらとありては梅の花
ゆきのふしゆなれはわらわとせゆるま

か
藤原隆信朝臣

か
藤原隆信朝臣

まはらばらばらとありては梅の花
ゆきのふしゆなれはわらわとせゆるま

か
藤原隆信朝臣

まはらばらばらとありては梅の花
ゆきのふしゆなれはわらわとせゆるま

か
藤原隆信朝臣

まはらばらばらとありては梅の花
ゆきのふしゆなれはわらわとせゆるま

か
藤原隆信朝臣

まはらばらばらとありては梅の花
ゆきのふしゆなれはわらわとせゆるま

か
藤原隆信朝臣

藤原隆信朝臣

まはらばらばらとありては梅の花
ゆきのふしゆなれはわらわとせゆるま

か
藤原隆信朝臣

物なき恋の心

進子内親王

今朝よるよあわしうらさあふらつねのさのうらた

あはれ

永福院

さふらふらあふらよしむ物にたはたはたのうら

あはれ

右上天

あはれ人よあおせいさうさあふらむのさあはれ

あはれ

進子内親王

あはれさあはれあわしうらさあふらつねのさのうらた

あはれ

殿安門院

あはれさあはれあわしうらさあふらつねのさのうらた

あはれ

永福院

あはれさあはれあわしうらさあふらつねのさのうらた

あはれ

右原為秀

あはれさあはれあわしうらさあふらつねのさのうらた

あはれ

後頼朝

あはれさあはれあわしうらさあふらつねのさのうらた

あはれ

右原為秀

あはれさあはれあわしうらさあふらつねのさのうらた

あはれ

右原為秀

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written on aged paper. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written on aged paper. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.

唐人市知

中納言家持

風雅和詩集卷第十一

戀弄二

虫約恋乃心と

永福院

けいじ中ののこころいひおぼゆるりおほくはるる
恋の所あら申す

うわさしこころいひおぼゆるるりおほくはるる

院冷泉

れのおこころいひおぼゆるるりおほくはるる

後三位親子

おぼゆるるりおほくはるるりおほくはるる

藤原重能

おぼゆるるりおほくはるるりおほくはるる

約恋と

新掌お

おぼゆるるりおほくはるるりおほくはるる

恋弄

伏見院新掌お

おぼゆるるりおほくはるるりおほくはるる

恋弄

前大細云尊成

おぼゆるるりおほくはるるりおほくはるる

永福院

永福院

おぼゆるるりおほくはるるりおほくはるる

約意

御園の前内大臣

よのしつらひのそとにあらはれぬわがまは約意のそとに

百首を中ふ

前大臣の意

れよぬいふたさしそとにあらはれぬわがまは約意のそとに

忠待意のそと

前大臣の意

首のよにあらはれぬわがまは約意のそとに

先福の御内大臣

つじゆらんあつらひのそとにあらはれぬわがまは約意のそとに

意を中ふ

御福の御

たのめけしめぬわがまは約意のそとにあらはれぬわがまは約意のそとに

御内大臣の御内大臣

いふにあらはれぬわがまは約意のそとにあらはれぬわがまは約意のそとに

意を中ふ

御内大臣

たのめけしめぬわがまは約意のそとにあらはれぬわがまは約意のそとに

御内大臣の御内大臣

あつらひのそとにあらはれぬわがまは約意のそとにあらはれぬわがまは約意のそとに

有原の御内大臣の御内大臣

御内大臣の御内大臣

てのめけしめぬわがまは約意のそとにあらはれぬわがまは約意のそとに

さうにあらはれぬわがまは約意のそとにあらはれぬわがまは約意のそとに

はよりしる御主人の御事なり

進子内親王

早御座り御事なり

徳川家の中へ 徳川院御事

まふけり今よりいふ御事なり

徳川院御事

りまの御事なり

御事

けさの御事なり

御事

同院御事

まの御事なり

御事

徳川院御事

おの御事なり

院御事

徳川院御事

おの御事なり

御事

徳川院御事

おの御事なり

徳川院御事

行幸より一札をいりてし事と

前々納言為意

此れより御事のついでに御事柄もあつた

二札をいりて 後二位為子

しりて又あけぬより一札をいりてあつた

ねりて 御園寺前内大臣

さうして御事のついでに御事柄もあつた

懐意を 賀茂重保

しりて御物のついでに御事柄もあつた

憲宗御中 進子内親王

しりて御物のついでに御事柄もあつた

約意の事 永福院

しりて御物のついでに御事柄もあつた

意の事

しりて御物のついでに御事柄もあつた

河内院百子御事柄

修理方史顯季

しりて御物のついでに御事柄もあつた

源兼氏御事

しりて御物のついでに御事柄もあつた

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

細うつうしめし 後二位頼政

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

藤原隆信朝臣

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

前大納言為家

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

あつた女ようしめし物うしよりてしりて

後二位為子

養子也なりしをいふ人なるはあはれなるなり

養中過志とす事也

養原為基朝臣

うらむをわたりていふことなるはあはれなるなり

女の内なるをいふはあはれなるなり

まゝなりていふなり

前大納言為家

まゝなりしをいふことなるはあはれなるなり

の海

前大納言為家

まゝなりしをいふことなるはあはれなるなり

の海

前大納言為家

まゝなりしをいふことなるはあはれなるなり

の海

の海

の海

前大納言為家

まゝなりしをいふことなるはあはれなるなり

の海

前大納言為家

まゝなりしをいふことなるはあはれなるなり

忠遇志 殿前門院一条

つじ中いすれのを新しほそそぬ人のたのまは種と約ま

て 建治百首言中は 後西園寺入道前太政大臣

久遠守神ふたりのまゆをみまうりたれぬまの

新し守 法人一と

わいふにまはあつし郭ふし時ふあひのまはあつ

つわ井の肩をたぬあつるたをぬまもあつ

百首言中より 章義門院

じふ中のつらふまをぬまのつらふま

百首言中より 殿前門院一条

あつるまをぬまのつらふま

忠遇志

新室門院行圓

あつるまをぬまのつらふま

あつるまをぬまのつらふま

あつるまをぬまのつらふま

あつるまをぬまのつらふま

あつるまをぬまのつらふま

あつるまをぬまのつらふま

あつるまをぬまのつらふま

あつるまをぬまのつらふま

阿比のめい... 権大細云云宗...

うりけり人... 権大細云云宗...

入道二宗... 権大細云云宗...

権大細云云宗... 権大細云云宗...

権大細云云宗... 権大細云云宗...

権大細云云宗... 権大細云云宗...

権大細云云宗... 権大細云云宗...

権大細云云宗... 権大細云云宗...

権大細云云宗... 権大細云云宗...

百首... 太上天皇

近子内親王

近子内親王

近子内親王

近子内親王

近子内親王

近子内親王

近子内親王

近子内親王

近子内親王

ゆめをかくくろく道にわが身を救ふ地をいふ

別恋の心を 後伏見流御前

ふやんまもるんこころは面影をうけしもの別恋

前入納言の女

あまのめもあまのこころの糸をうけぬはあまの車

高介の車は あり納言の家

のちかひかけ乃れおのよのよれいあくわ人はいふ

進子四親王

りあゆまひくろくろくまきと又い言をうけしもの別恋

後朝意と 水福の院

そ乃まればあの名は乃まねまふ又むけくはあひと

后三位親子

あまのまら日敷意とくまきとけし別恋をうけしもの

永福の院御前

ゆよのまのまらいあまのまらとあまのまらとあまのまら

た月より控ゆりまら人のり

和泉式部

人をゆきかきまらたよきとあまのまらとあまのまら

あまのまらとあまのまらとあまのまらとあまのまら

あまのまらとあまのまらとあまのまらとあまのまら

藤原九郎

とよむらひをいふに

...

...

...

...

...

...

...

凡相和歌集卷第十二

...

...

...

...

...

...

...

...

...

てはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

院淨弁

くも申してはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

るれはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

はかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

院二位親子

のよかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

院二位眞子

はかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

はかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

はかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

はかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

はかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

はかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

はかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

はかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

はかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

はかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

はかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

はかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

はかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけりてはかたきつとていふにけり

一 分のわきまをとりあきしませしむる事

其意の正し

藤原為名朝臣

何れにほのせんとぬいよ人も思ふ事

いふ事の中よ

しりらわきまをとりあきしむる事

院所并

あはれにむかひたぬ事りといふ事

いふ事の中よ

いふ事の中よ

いふ事の中よ

いふ事の中よ

院所并

いふ事の中よ

いふ事の中よ

前大納言為魚

いふ事の中よ

いふ事の中よ

いふ事の中よ

いふ事の中よ

いふ事の中よ

いふ事の中よ

百首方中一 入道二親

人よれらるるは秋風をそめてあはれしはげしき人

入道二親

まよふ心はうつらうつらのまよふまよふまよふまよふ

宣光門院新香清

あはれはるるは秋風をそめてあはれしはげしき人

新香清

永福の流

あはれはるるは秋風をそめてあはれしはげしき人

あはれはるるは秋風をそめてあはれしはげしき人

入道二親

進子日記

あはれはるるは秋風をそめてあはれしはげしき人

百首方中

権大納言

あはれはるるは秋風をそめてあはれしはげしき人

あはれはるるは秋風をそめてあはれしはげしき人

あはれはるるは秋風をそめてあはれしはげしき人

あはれはるるは秋風をそめてあはれしはげしき人

あはれはるるは秋風をそめてあはれしはげしき人

あはれはるるは秋風をそめてあはれしはげしき人

あはれはるるは秋風をそめてあはれしはげしき人

あはれはるるは秋風をそめてあはれしはげしき人

あはれはるるは秋風をそめてあはれしはげしき人

と一見一見のふらふらと見ゆるにうたふる世の世とて

色紙と

院一条

うらやまのふらふらと見ゆるにうたふる世の世とて

色紙と

院一条

うらやまのふらふらと見ゆるにうたふる世の世とて

色紙と

院一条

うらやまのふらふらと見ゆるにうたふる世の世とて

色紙と

院一条

うらやまのふらふらと見ゆるにうたふる世の世とて

院一条

うらやまのふらふらと見ゆるにうたふる世の世とて

院一条

うらやまのふらふらと見ゆるにうたふる世の世とて

院一条

うらやまのふらふらと見ゆるにうたふる世の世とて

院一条

うらやまのふらふらと見ゆるにうたふる世の世とて

うらやまのふらふらと見ゆるにうたふる世の世とて

院一条

うらやまのふらふらと見ゆるにうたふる世の世とて

後醍醐天皇

朕と人衆の心とを一つにせむと欲す

御意の如し

御意の如し

山平入道前右大臣

御意の如し

御意の如し

御意の如し

御意の如し

御意の如し

人の心と我とを一つにせむと欲す

院一系

御意の如し

御意の如し

御意の如し

御意の如し

御意の如し

御意の如し

御意の如し

御意の如し

はしむるの事なきにあらざるをいふ

百首の事なきにあらざるをいふ

世にあらざるをいふ事なきにあらざるをいふ

題しす 水福の流

大なるむじくはまの事なきにあらざるをいふ

後書信書

ちの事なきにあらざるをいふ事なきにあらざるをいふ

伏見流御前

あつらひの事なきにあらざるをいふ事なきにあらざるをいふ

後書信書

流の事なきにあらざるをいふ事なきにあらざるをいふ

水福の流御前

その事なきにあらざるをいふ事なきにあらざるをいふ

後書信書

流の事なきにあらざるをいふ事なきにあらざるをいふ

水福の流御前

あつらひの事なきにあらざるをいふ事なきにあらざるをいふ

後書信書

流の事なきにあらざるをいふ事なきにあらざるをいふ

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

藤原公高好長母

新...
乃...
...

...

檜大細云公蔭

...

百着...
正二位

...

...

...

...

...

...

...

休見院御寄

...

...

...

...

...

儀子内親王

...

道元つ説新を傳つ書

ととよりふ人をかゝるんむきふせり人のおくハのこゝぬ

通書意をいふとては中実性

かよふをいふれまんじうふ末はとてぬれん人の

人のふをわてくくちうはとて根をゆき

漢人志ん

常盤山家もとぬまのふれ多けり海よいそちん

相換

とてぬれん人のせいにれは海風よりまてよちん

莫守朝臣みらのくまゆ人のいんをゆ

てぬれん人のいれとてぬれはゆきとてゆりけり

年一人よりして三多流女流人を

もてはわらうのよゆいとてぬれはゆきとてゆりけり

寶治百首方小宗玉意

範山後前内大臣

とてぬれん人のいれとてぬれはゆきとてゆりけり

冷泉前右政大臣

白むう何れとてぬれ人のいれははゆきとてゆりけり

とてぬれん

河原の所集人歌三

風雅和詩集卷第十三

戀哥四

日しりあゆみあに人のしめつらき

杉中細玄定頼

はまぐしけりあゆみのこまらけはかきと人しりあゆみ

あゆみ日女乃のしりあゆみておてつらき

左を大お船光

はまぐしけりあゆみあゆみの少くしりあゆみ我のあゆみ

わしりあゆみ馬月信

はまぐしけりあゆみのこまらけはかきと人しりあゆみ

わしりあゆみ

貫之

はまぐしけりあゆみあゆみの少くしりあゆみ我のあゆみ

人のしりあゆみおてつらき

和泉式部

はまぐしけりあゆみのこまらけはかきと人しりあゆみ

わしりあゆみ

清人あゆみ

はまぐしけりあゆみあゆみの少くしりあゆみ我のあゆみ

はまぐしけりあゆみのこまらけはかきと人しりあゆみ

はまぐしけりあゆみの少くしりあゆみ我のあゆみ

小町

今...の...
...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

きこく揚るあし世にうけんとすべしとていふ

あつたてのうけとていふはあつたてのうけとていふ

あつたてのうけとていふはあつたてのうけとていふ

四十番方合の御書

院印

あつたてのうけとていふはあつたてのうけとていふ

院印

あつたてのうけとていふはあつたてのうけとていふ

無方の中

院印

あつたてのうけとていふはあつたてのうけとていふ

又方合の御書

院印

あつたてのうけとていふはあつたてのうけとていふ

無方

院印

あつたてのうけとていふはあつたてのうけとていふ

院印

あつたてのうけとていふはあつたてのうけとていふ

院印

おのれは心もあはれ人のけむりもあはれ

永福院内侍

あはれ人の心もあはれ人の心もあはれ

前大納言の女

あはれ人の心もあはれ人の心もあはれ

五十番の合の家人

永福院を傳へ給

あはれ人の心もあはれ人の心もあはれ

又首の合の意地合

儀子内親王

あはれ人の心もあはれ人の心もあはれ

意地合

後伏見院中納言典侍

あはれ人の心もあはれ人の心もあはれ

宣旨門流の傳へ給

あはれ人の心もあはれ人の心もあはれ

藤原実光の侍

あはれ人の心もあはれ人の心もあはれ

右京後を

あはれ人の心もあはれ人の心もあはれ

権大納言の母

延政門後新大御云

いふんやのりし海のそとにわたりてはるる

七月十日

西文前在石

七つははるるはとてはるるはるるはるるはるる

急方中

時

拂ふりし梅七つはるるはるるはるるはるる

急方中

いふんやのりし海のそとにわたりてはるる

いふんやのりし海のそとにわたりてはるる

永福院

これものゝ物とてふに花の影を梅とてふ

人はなほとせたり 先春天中御寄

花はれ花の影をせよとて花乃はるるはるる

急の方中

花の影の多う花とてふふあはるるはるる

快人

急方中花の影をくたけはるるはるるはるる

鎌倉石

急方中花の影をくたけはるるはるるはるる

急方中

和泉武敏

ゆきよのわがけりうしあきぬ人よしの月と
月の久我田倉のしんくさ

小竹後

きしんおの月と六月の物とひるよの月と
あ

久我田大信

とくしんくさの月と六月の物とひるよの月と

伏見院御寄

あふ人よしの月といふまゝの月とひるよの月と

月院新宰相

ひるよの月といふまゝの月とひるよの月と

権大細言公蔭

表のふあふのあふの月とひるよの月と

前大細言公蔭

前大細言公蔭

あふの月といふまゝの月とひるよの月と

藤原隆清御長

あふの月といふまゝの月とひるよの月と

大僧正御長

あふの月といふまゝの月とひるよの月と

意方合の中示 中院前右改大旨

うらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

ふし可表方合の 後多極極改前右改大旨

秋のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

秋のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

秋のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

秋のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

秋のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

秋のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

秋のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

表のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

表のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

表のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

表のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

表のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

表のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

表のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

表のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

表のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

表のうらまひのしるしをばしめしむるに面影をぬかり明の月

うまにまゝぬらう表はたけの人のあまのりたてのあまのり

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

あまのりたてのあまのりたてのあまのりたてのあまのりたて

引くめりたるしよとていふまじのまゝ人のけりせ

急めよ
院普濟

かゝりのうらまはしはびらもけりくませしにこれ

實治百首より寄虫魚

前大細言為家

後ひらきまの解きまのしをれきまのけりさわハ

上括號よし人と思ふ事と

院普濟

人といふのうらまはしとていふまじのまゝ人のけりせ

院普濟

まゝと人まゝとていふまじのまゝ人のけりせ

寄情まゝとていふまじのまゝ人のけりせ

後ひらきまの解きまのしをれきまのけりさわハ

藤原宗季

れらまゝとていふまじのまゝ人のけりせ

院普濟

うらまはしはびらもけりくませしにこれ

院普濟

今もまゝとていふまじのまゝ人のけりせ

れらまゝとていふまじのまゝ人のけりせ

建長三子吹田より十首奇海をれり

後醍醐天皇御前

うき世の世もわすれぬ世にわすれぬ世にわすれぬ世に
あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

猶ほ云

はらけよ南よりそら北地ととの命乃らうと
けり

あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも
あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

風雅和詩集卷第十回

恋平五

百首奇

太上天皇

あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも
あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

恋平五

殿安門院

あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも
あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

永福院

あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも
あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

内大臣

あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも
あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも



高階師直

わがしるしあはれきりていつけりてあきかたけに
後を遺流しとせりしる百有言乃中よ

前中納言雅孝

ふりてわがむし命を立よとる力おあすもあ

清輔朝臣

中しよあひたさんとあふりてきりしりも昔しりれ

殷富門流大輔

とまもつてあはれきりていつけりてあきかたけに

権左衛門尉家

人このまふらと今もつて建れりしりあはれ

源人あはれ

まの法をのこしとあはれきりていつけりてあきかたけに

まろくつりてあはれきりていつけりてあきかたけに

あはれきりてあはれきりていつけりてあきかたけに

小堀りてあはれきりていつけりてあきかたけに

藤原道信朝臣

あはれきりてあはれきりていつけりてあきかたけに

あはれきりてあはれきりていつけりてあきかたけに

あはれきりてあはれきりていつけりてあきかたけに

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

法入の法

前中納言重貞

何よりおそれられし事なき我の行止人の心を

百首分守に 権大納言公宗母

人よさうつらむ事なきらんさうり命さうさ

権大納言公宗母

あはれあかも人とのわぬふれたる面影のさうあはれん

後子内親王

我のふらさうたあつれさうり後りれあはれん

百首分守に 権大納言公宗母

あはれあかも人とのわぬふれたる面影のさうあはれん

藤原為季朝臣

あはれあかも人とのわぬふれたる面影のさうあはれん

根立のりそ 後二位太子

あはれあかも人とのわぬふれたる面影のさうあはれん

依見院行弁

あはれあかも人とのわぬふれたる面影のさうあはれん

あはれあかも人とのわぬふれたる面影のさうあはれん

権大納言公宗母

あはれあかも人とのわぬふれたる面影のさうあはれん

周右大臣

縁うとの物く表えり細末人の行末は

凡そ清徳直義

通事ハキしあち中ノ同世の終りをりそえり

無方中ノ 後之位職親

人心にたわまりおいらん世とていふ事

西園寺前内大臣

無事ん力よよ表えり細末人の行末は

或の極的親

あまのあていふ事あつらん教世の終り終り

永福院

あまのあていふ事あつらん教世の終り終り

あまのあていふ事あつらん教世の終り終り

同院書局

あまのあていふ事あつらん教世の終り終り

家中無 朝平門流

あまのあていふ事あつらん教世の終り終り

觸物横無

永福院

あまのあていふ事あつらん教世の終り終り

永福院

とて神よりくは世に日かゝるははらふ影

に過ふを世の心で 前中納言定家

とていふまじき世の月をみてかゝる命よのらる影

定家百首 前中納言 定家

後二位 顯成

うらみよりかゝる月の影をよはしてはとてかゝる影

定家百首 前中納言 定家

みまへハ杉木の揚りたてふはかりよのたて

後醍醐朝

とていふらぬかゝる影をよはしてはとてかゝる影

前巻 源家親

思ひたてしはかゝる影をよはしてはとてかゝる影

百首 前中納言 定家

とていふらぬかゝる影をよはしてはとてかゝる影

とていふらぬかゝる影をよはしてはとてかゝる影

前巻 源家親

とていふらぬかゝる影をよはしてはとてかゝる影

相撲

とていふらぬかゝる影をよはしてはとてかゝる影

とていふらぬかゝる影をよはしてはとてかゝる影

世り

後人を以て

我より後を以て後を以て今了る人をして

也

藤原相如

これわが世に於て多かる事なるに於て

人伴良女は流りし事

中細云家持

若しは心をとてわが世に於てみよる事

也

後人をして

若しは心をとてわが世に於てみよる事

人麿

若しは心をとてわが世に於てみよる事

人を行きまわす

若しは心をとてわが世に於てみよる事

也

人をして

若しは心をとてわが世に於てみよる事

也

西園寺前内大臣女

若しは心をとてわが世に於てみよる事

水鏡の流

若しは心をとてわが世に於てみよる事

伏見院御前

あはれにみゆるをこそおもひてはさしつかへなくして

おとどけはかりはるる人ばへはたしはたしとてよまはれ

あつらふふらふはるる人ばへはたしはたしとてよまはれ

あつらふふらふはるる人ばへはたしはたしとてよまはれ

京都前園白象殿様

さうりてはるる人のたしはたしはたしとてよまはれ

頭不知

般富門院左衛門

あつらふふらふはるる人ばへはたしはたしとてよまはれ

あつらふふらふはるる人ばへはたしはたしとてよまはれ

あつらふふらふはるる人ばへはたしはたしとてよまはれ

あつらふふらふはるる人ばへはたしはたしとてよまはれ

あつらふふらふはるる人ばへはたしはたしとてよまはれ

あつらふふらふはるる人ばへはたしはたしとてよまはれ

あつらふふらふはるる人ばへはたしはたしとてよまはれ

あつらふふらふはるる人ばへはたしはたしとてよまはれ

善成王

あつらふふらふはるる人ばへはたしはたしとてよまはれ

あつらふふらふはるる人ばへはたしはたしとてよまはれ

あつらふふらふはるる人ばへはたしはたしとてよまはれ

あつらふふらふはるる人ばへはたしはたしとてよまはれ

かきわたりしうらなひのあはれさしふはまのうらなひ

あはれさしふはまのうらなひ

あはれさしふはまのうらなひ

あはれさしふはまのうらなひ

あはれさしふはまのうらなひ

新宰相

あはれさしふはまのうらなひ

あはれさしふはまのうらなひ

あはれさしふはまのうらなひ

あはれさしふはまのうらなひ

今ふかきわたりしうらなひのあはれさしふはまのうらなひ

藤原隆信朝臣

あはれさしふはまのうらなひ

あはれさしふはまのうらなひ

あはれさしふはまのうらなひ

あはれさしふはまのうらなひ

二位為子

あはれさしふはまのうらなひ

あはれさしふはまのうらなひ

あはれさしふはまのうらなひ

子文可書言命よ 海島集河臣

侍つておのれ世にたふさず身のまゝに別つてけりやとてえん

恋座寄りの中より 幸徳流は寄りのおのれ

ふびりの身よ人のつとむらあひだり町よきし海しる

は二位宣子

よあつちのちめれとてらりの秋行くははるよよの年

建永三年八月廿七日唐市寄命よ徳久忠

前大納言その氏

まのりの人乃れあつちのちめれとてらりの年月ち

風雅和詩集巻第十四

雜歌上

年のちめれ人のちめれわがちめれちめれ

中納言魚捕

わがちめれ人のちめれわがちめれちめれ

まはる人ちめれちめれ

左衛門守又頭捕

まはる人ちめれちめれちめれちめれ

ちめれちめれ ちめれ

まはる人ちめれちめれちめれちめれ

一、山内康元は信長の子にあり

永福院内侍

山内康元は信長の子にあり

信長の子にあり

清原元輔

年々其の志は信長の志にあり

題一、

夢窓圓師

山内康元は信長の子にあり

山内康元は信長の子にあり

永福院内侍

山内康元は信長の子にあり

題一、

平重朝卿

山内康元は信長の子にあり

山内康元は信長の子にあり

山内康元は信長の子にあり

清原元輔

山内康元は信長の子にあり

題一、

藤原澄信朝臣

山内康元は信長の子にあり

題一、

永福院内侍

雪のふりゆく所の梅はさかすかに咲けり

あふ人の心はさかすかに春草の梅をう

つてうめつさへゆきて送るゆめはかきつ

てはなれぬ

せふもわぬまをいぢりたりまじり此宿の梅は枝

定ぬるまをいぢりたりまじり此宿の梅は枝

うらゆかりおりのさかすかに梅の影

枝はゆかりおりのさかすかに梅の影

さかすかに梅の影はゆかりおりのさかすかに

さかすかに梅の影はゆかりおりのさかすかに

おかしうさかすかに梅の影はゆかりおりのさかすかに

さかすかに梅の影はゆかりおりのさかすかに

さかすかに梅の影はゆかりおりのさかすかに

さかすかに梅の影はゆかりおりのさかすかに

さかすかに梅の影はゆかりおりのさかすかに

さかすかに梅の影はゆかりおりのさかすかに

さかすかに梅の影はゆかりおりのさかすかに

梅の花はさかすかに梅の影はゆかりおりのさかすかに

梅の花はさかすかに梅の影はゆかりおりのさかすかに

梅の花はさかすかに梅の影はゆかりおりのさかすかに

うら

...せり...

源河内

...の...

...の...

...の...

...の...

源河内

...の...

...の...

...の...

...の...

春暁を

...の...

源頼春

...の...

源二位為子

...の...

...の...

...の...

...の...

前大僧正慈隆

号中々行好ありふろまらんは妙蓮寺の御方乃

云す首前中々 亦中納言定家

云事一折くありとらんよあしりまれの御

云一守 前大納言為兼

書おきてるありとらん云事おのりけり末のまれの

伏見とて人々を御と云りて云つて云つて云りけり

伏見とて人々を御と云りて云つて云つて云りけり

伏見とて人々を御と云りて云つて云つて云りけり

伏見とて人々を御と云りて云つて云つて云りけり

伏見とて人々を御と云りて云つて云つて云りけり

伏見とて人々を御と云りて云つて云つて云りけり

伏見とて人々を御と云りて云つて云つて云りけり

伏見とて人々を御と云りて云つて云つて云りけり

伏見とて人々を御と云りて云つて云つて云りけり

伏見とて人々を御と云りて云つて云つて云りけり

伏見とて人々を御と云りて云つて云つて云りけり

伏見とて人々を御と云りて云つて云つて云りけり

伏見とて人々を御と云りて云つて云つて云りけり

伏見とて人々を御と云りて云つて云つて云りけり

伏見とて人々を御と云りて云つて云つて云りけり

春のよきしんじつに思ふのこころは小春の如くはなれり

前中納言定家

あひのたのむるふりよこをぬきし山崎に人さきよ

を清右衛門右衛門は紅梅をまわしてゆきし

次の子れま花の咲きしはよそをわけてゆきし

もろよしむいつけゆきし

後人定家

うらうらと色もよき梅を君にわきし

うらうらと宿の梅もよきわきし

思ひ

大の春周つとよりよのよとく歌きゆりし梅

花と見て 赤深き

うらうらと色もよき梅を君にわきし

陰月乃以梅花よつとてまひけり

大徳の初家

あつとよき梅の咲きしはよそをわけてゆきし

佛道中 紫徳流西奇

あつとよき梅の咲きしはよそをわけてゆきし

朝中つとよき 前大徳と為る

時日ぬきくまわらば花のうらさく小ぼうつらうん

花 後山守宗大住持

さしおき思ひみみの時わかれかよゆりわら花のえと

法勝寺上人 花守有乃方よりみゆりより

花よあそつ井上清き山橋あそつと所わぬ庭とねえ

花守有乃 僧正公朝

花のつらうらもあつたり山あつくけ花守有乃

百首寄有乃 一時去る

是巻は親王

花守有乃のうらもあつたり山あつくけ花守有乃

去述懐の心と 伏見院御寄

花守有乃のうらもあつたり山あつくけ花守有乃

前中納言為相

花守有乃のうらもあつたり山あつくけ花守有乃

山あつくけ花守有乃のうらもあつたり山あつくけ

花守有乃のうらもあつたり山あつくけ花守有乃

花守有乃のうらもあつたり山あつくけ花守有乃

花守有乃のうらもあつたり山あつくけ花守有乃

花守有乃のうらもあつたり山あつくけ花守有乃

花のよき道徳のよき人 島田よりよきものありてお

きひたりよき道のよき花のよきものあり

せきん 藤原惟親

花のよき道徳のよき人 島田よりよきものありてお

式子内親王 藤原惟親のよき花のよきものあり

花のよき道徳のよき人 島田よりよきものありてお

中將

花のよき道徳のよき人 島田よりよきものありてお

建礼門院 藤原惟親

花のよき道徳のよき人 島田よりよきものありてお

去方中よ 名実定忠

花のよき道徳のよき人 島田よりよきものありてお

二条院 藤原惟親のよき花のよきものあり

花のよき道徳のよき人 島田よりよきものありてお

花のよき道徳のよき人 島田よりよきものありてお

花のよき道徳のよき人 島田よりよきものありてお

後三位 藤原惟親

花のよき道徳のよき人 島田よりよきものありてお

花のよき道徳のよき人 島田よりよきものありてお

花のよき道徳のよき人 島田よりよきものありてお

かろよぬぬの梅のさうりわちせらばよつげくち
さよふれや舟の梅花さうりわちのさ
よけりまや舟の舟さうりわちのさ

源人ふく

さうりわち舟の舟さうりわちのさ
にけりわち舟の舟さうりわちのさ

冬川内侍

さうりわち舟の舟さうりわちのさ
文保三年三月の舟さうりわちのさ

中よ

梅中納言云雄

さうりわち舟の舟さうりわちのさ
元化二年三月の舟さうりわちのさ
けりわち舟の舟さうりわちのさ

前大納言云魚

さうりわち舟の舟さうりわちのさ
花舟中よ
白名舟さうりわちのさ

さうりわち舟の舟さうりわちのさ
舟さうりわちの舟さうりわちのさ
舟さうりわちの舟さうりわちのさ

後二位云舟

舟さうりわちの舟さうりわちのさ

此の巻は百首の中に見花といふことを

皇太后宮女

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

院師奇

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

あねもふらせいゆにけ山の庭より花とらふりしれ

永福院

時をぬるの影法師花より春ふとれ又とれと

院師守

春うらた深心これのまゝあてりたき花の影法師

花の影法師

和泉式部

ありとありまの命のやうなふ花うら世のやうに

院師

風もけいさあお水も若くして流す川流の影法師

源貞行

山深く花子のくきつおまの風うらたぬ花もわりたり

源貞世

お花とせめてほふあやうはふ風乃精と思ふん

平親清女

らりまへよ人もいぬまのなうらみやははら花の白雪

源和義

玉まもいほふまうまはる秋風よあつと思ふ

源貞泰

あつたは春より花あつたりあつたりあつたり

源高圓

まゝのくを昔よりとくひのたの枝より月影

百首前此中の去月後二位家信

にふも昔此影のうらりうらりたるもてなるまの月

に解のま

何とぬぬと神のたをさねくつと守まの秋乃

後系後拾改たたおのゆけの時家は六百歳を合

しゆまのまま白とよあり

最原澄信初信

か〜つはのまの行もまの只改乃けさ物と何とん

春前とて

今山とま行よこれと着まれば花うらひとれ一時乃

山階入道とまは家十首前と和歌と

山入道前太政大臣

新うはをねと本うはまの池よみうらうらまを白も最原

和歌のま

唐とては池のまこれ松うらふのけりてまひくまは前

春分乃事

山原の花のまうみゆれもまをまをまをね井はれ川

ゆり人海生のまをまをすゆきれん

水陽の流たき草

とよむのしん花のわらわしと約せしむるまはるまはる

難中一ふ 前大僧正慈徳

あぬふふかきふふふの物よふむくりふの

百首方讀ゆふふ 深心流國白前大僧

中河のわら新瑞ふふふく家おふふふふふの

部一守 臣三位氏久

みあきあふふてふけふのふふふふふふふふふ

鄭とと 高階重成

ゆふふふふふふのふふふふふふふふふふふ

ふふふ連

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

前大僧正忠源

あふふふふふふふふふふふふふふふふ

前大僧正忠源

あふふふふふふふふふふふふふふふふ

藤原景徳

あふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふ

権中納言宗純

尋ね入海山くつひの... 世の外乃し...
右大納言...
...の...
...の...
...の...
...の...

源入...

様... ぬ... 月... の... と... の... くら... くら...

... 世... とう... び... せ... ば... あり... と... あり... あり...

後二位宗子

... せ... も... あり... あり... あり... あり... あり... あり...

源...

後二位宗子

... 乃... あり... す... あり... あり... あり... あり... あり...

... の... あり... あり... あり... あり... あり... あり...

... 夕... けて... あり... あり... あり... あり... あり... あり...

... 松... 尾... の... あり... あり... あり... あり... あり... あり...

... の... あり... あり... あり... あり... あり... あり...

... 晴... あり... あり... あり... あり... あり... あり...

津守國元

たゞおくおけいひかゝぬ月夜ようきしゆらほのほのり
高階重茂
ほそきよひくふりりぬおま衣回義のゆれ有ぬれ
源朝成
今よりも夕暮とて一里門の山内踏くを雲の一村
野々立 惟宗光吉朝成
ゆのゆいほのやよあはれてとらゆらとら夕暮の
あす着山の中は夏あま
伏見院御寄
まもれとあけとせよみいれて心の末の道とてとす

山家映源しり事と

前巻儀雅有

あうく外面のま原風とてなとわとて山乃下け

夏の中よ

懐人少知

村を晴の日の山けり流吹やそ風の時と

源貞頼

山平よ日影とよぬふえれの氷れわらうとあま

秋しす

儀子内親王

あまよりまこととゆはるる月の影も蒼よとて成り

迷懐百首寄の中よと

皇太后文を復成

まゝの麻草のしとのおまゝにせしめし給ふに
小野社よりなりきり百首なり

前入納言為家

二月やとてしよひふとくうりあすもあはれもあせ中

頭一守 後之位基補

秋をさすれしけり風をくく夕日すし一さ秋の下にけ

久の貞様

まはりの志根の信ありこころこころの縁のなう清き

菅原秀治

一ひ乃や吹とる山岡よりおきすし一りしりし

惟宗光吉朝臣

ふあは急の巻もりよとてせあひし人の救きす

貞室上人

志るはよ泉乃おきもさきまをくふとわぬ麻の清き

河原流よはは揚顯服守合一ゆかりは船の

るそことしよとて 菅原隆信朝臣

ふとるし報い節て甚そそく清芽子海り麻を此記

七月七日龜山院より七夕あめされきり時うみ

ゆきり 後西園寺入道前太政大臣

若衣神のちくとまゝうとこりもさうつまはらの

おのり心と 散原秀行

まは川さうらおのされ梓さうて一和とをさうり初

高潜師冬

物林いさしちうくぬねまされいあさるや物さうま合の

寧世間安隠一身辛と云事と

志政上人

のらさうかとも心の結風さうさうなりは神力白落

行ら守 只岐法師

さうま守も夕の露乃まらさう屋の小社乃まらさうか

武徳久明親王

人おれ林乃まらもつさそ新さうまら此ゆさうれの文

人江貞廣

物ま物まてうせら表いねさうすさそれまら林のさ書

和氣全成朝臣

日新抄の難のまはさうらまらさうとらうくさうりくさ

前住僧正圓印

さうてまら老の枕乃さうくさうらん法のあられさ

賀茂重保

のら書さうらつ野の風乃まらさうらまらさうく物さうら

燐述懐とらしと 前中納言相

昔自野は秋もく麻もあふくまよと一しなのうらめし

枯すあまこころをせぬとありよ

順徳院御歌

鹿の跡をいねの跡に次をせととの道おちるまの

田家のゆと

伏見院御歌

おちぬらつ田乃末の山あして 稲はまかり入日とあふ

流とよめる

昔とく

松の香とこころあふぬか 松風の流の多とよとせし月見

枯す乃中よ

後鳥羽院御歌

あまこころの入り 霧晴て 山流 松乃のまを

松少僧御歌

入日守 海よりとられ 松乃の霧吹ふ 松乃の風

百首 古事一首

前大納言御歌

雄風より松乃のまを 松乃のまを 松乃のまを

頭一首

前原頼清御歌

晴る 山乃のまを 松乃のまを 松乃のまを

藤原宗行

かよる 松の稲葉乃のまを 山乃のまを 松乃のまを

松乃と

中長社文

嵐もくはる緑のそいやとれて禁影をりて河林の村む

類あつと 平英時

あつと新瑞の森のともりも桐の葉あつた庭の林

明通法師

きはまき抄の目録のうす音に落見しうめしげえき

藤原宗泰

清の浦や波流の末の亭嬉てり白よ抄の浪流清山

前大納言三成

ね風よ月乃尾よいさえとれて亭の梅もよは標麻のや

後守の儀七々七首首首よ約速と

中納言公雄

今もとほとぬおゆの林乃まをれり月乃約

に好七首首首よ湖月と

いづれもかてる浦の林風おうさや寝て月うさ

いづれもかてる浦の林風おうさや寝て月うさ

月乃あれ中よ前大納言尊氏

地蔵山松原よ月あつた梅もよの梅はねえ

津守國廣

いねえよまあまそわ林の月あつた影のあしきふん

賀茂經久

思ふとあつたはまはくは入月の新くまの

藤原為守女

此の月よもわらふれゆらゆらおのたのま

藤原懐通朝臣

このよなるれは月を思ふて我のまの月乃をみさ

和氣権成朝臣

あつたはくはくは月乃を思ふて我のまの月乃をみさ

丹波長典朝臣

あつたはくはくは月乃を思ふて我のまの月乃をみさ

は常源令

あつたはくはくは月乃を思ふて我のまの月乃をみさ

貞永元年八月十日中々女房のまの月乃をみさ

あつたはくはくは月乃を思ふて我のまの月乃をみさ

光のまの月乃を思ふて我のまの月乃をみさ

あつたはくはくは月乃を思ふて我のまの月乃をみさ

後堀河院御記の典

あつたはくはくは月乃を思ふて我のまの月乃をみさ

護持のまの月乃を思ふて我のまの月乃をみさ

二品は親王の胤

あつたはくはくは月乃を思ふて我のまの月乃をみさ

百首寄事一冊 入道三京親王の巻

ついでしうからるる先れ奥山の巻にわがふとせり月影

雜交れ中本 儀子内親王

さうさうさうさうの月の影をみてもきん松よまゝらさる

丹波忠孝朝臣

秋さしき青ののそれ一時ぬくも月の信りりたり

山家月と 恵助は親王

いひしき世の外乃山家月影のちとて新しん

世のうましくぬあつまは垣竹もははあ

藤原為守

ほろりゆりさるる月影のまゆのまゆの林

新しん 比中澄剛

うれてさ月うさるるのそとてささるる林乃こり

兩年又の内裏の序屏風月影の女の影の界

いさうそものこよわて地いせうあ

母之

山の端は入るるさ月影の我をさぬるあんなる

女之

久き月のたよりよか人をささるるぬあわしとせあ

あさしわうたるは 藤原法師

ほくくといふは...とわたりてとわりの月...とあり

右筆大貳重家

月影のうらやまともいふ人の心乃やこのれいづわめ

月前述懐と

後惠法師

まじしは方のうらやま此れあやうきとていふや月と云

月夜を乃中

右筆大貳重家

歎くといふ神のあといふれはあやうきとていふや月と云

右二位家隆

昔ふらり...とわりの神のうらやまは月影のうらやま

月十二首あふく...とていふや月と云

右見院新

春えもゆらゆらひのまはりてあせの月影はわめ

昔月影とていふや月と云

院新

やゆらぎまの月影とていふや月影の中は影に

院新

右筆大貳重家

ゆらぎあひとていふや月影の中は影に

院新

まをたふらひのまはりてあせの月影はわめ

雑沓れ申よ 前大僧正慈勝

恙より座のつね乃若此うまきをひくろの如乃林

れ紫を 祝成國

一不ぼりて後も保くたり時多し山乃めり

林方に 萬葉上人

うのく尾花の末の夕附日うつすはこれ林の書る

善娘の如と 大江子雲

山より林とれねどはくろは林の紫はよき朝霧

休の末つこよりぬうらつたは十月つよ

り 和泉式部

とん程いよらうのつたさうり時ぬららもせ

むす 友原冬頼

夕附日うつしよつらりて時多しよ心界のね

祝成國

もくね板屋の形乃時多しよ月よゆりあ

為紫交ぬいし事と

前大僧正賢俊

津月時ありまうれおきかちりよ雅とらるん

冬より神小 二品法親王尊胤

為紫交ぬいし事と 又はちの切木かしの風

國府をりて 後二位為子

のりて相のあまの風をきて人言せぬ宿の夕音

風前を業といふはよき世にせむる

後伏見院所昇

山麓よりくぬけりお粟れそまゝお世のくもる

林を月の光を入道前実白のりあり

事つゆらと下れりてゆらぬ事よらと

あまのりてまゝのりてまゝのりて

まゝのりてまゝのりてまゝのりて

あまのりてまゝのりてまゝのりて

あまのりてまゝのりてまゝのりて

藤原高純

あまのりてまゝのりてまゝのりて

百首あまのりてまゝのりて

あまのりてまゝのりて

あまのりてまゝのりてまゝのりて

あまのりてまゝのりて

あまのりてまゝのりてまゝのりて

あまのりてまゝのりて

あまのりてまゝのりてまゝのりて

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

一 部 一 寸 法 守 年 承

順徳院所并

中うまの産の産おびしての膏きりくめおじれ

前権僧正隆徳

あつたの入海けてなふる月よりわらわのまじ橋立

後守の後七夕七首前守浦子考を

前中納言有忠

はるの秋は秋くも浦子考をわらわの心もあはれ多しの

紀行春

紀つらんくせりきね源子考のわらの浦ふれなはれ

友新

わらわもあはれきりみりせ川をさうわらわらわらわら

藤原基雄

山川の若くはあつた紅葉のあつたもあつたもあつたも

堀川後百首前守源電を

後頼朝

あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつたの

いふせんさいのあつたのあつたのあつたのあつたのあつたの

前権僧正静休

あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつたの

一 おきりいひと 前住信正雲雅

かろふはしらの月日もいふて先の教より年の暮る

をうらなふ 考部は照明親王

行末をうらなふつぎくたうのかよふはと文部よりいれ

厳著よりいへる 前中納言為相

今いふふふふのうたれ表の御書をまばまらん

せとうむきをばらまは位ゆるりよのうたれ

四のつかりのまゝのなと推まとも乃のうたれ

ゆたれ 藤原為基朝臣

山人の御書乃たよふたぬちあつてや年れ書とてい

百首あまのり一時を平

永福の流内侍

まはらうまのりあまのむのけらふとあまの

まはらうたあ

[Blank page with faint smudges and a small mark at the top left]

Handwritten text in vertical columns, including a red square seal impression in the upper right quadrant.

